読売俳壇

矢島渚男 選

姫始め君が教えし契りかな　赤磐市　黒岩　博美

【評】姫始めは年初めの男女の交わり。短歌ではあまり見ない俳句特有の率直な言葉。この美しい言葉やおこないを教えてくれたのはあなた。

年の暮獄舎で編みしレース買ふ　泉佐野市　高松　良子

【評】獄中で編まれたレースを買った。どんな境遇の人が編まれたのか。丁寧な立派な作品だ。

夢もまた命の一部山眠る　柏市　藤嶋　務

【評】夢も生きている生理現象。運動選手などが頂点を目指すのは願望の意味に近い。昔の禅僧がよく書いた「夢」とは何だったのか。「山眠る」の季語にかけて大きな句になった。

ノーモアの声高らかに冬の空　横浜市　杉山　太郎

底石の底に影あり冬の水　佐野市　高橋すみ子

アナログを通す生涯大根引く　白井市　酒井　康正

妻死んで冬至南瓜も喰はざりき　高島市　足立てるを

失せ物のあきらめもつき冬至風呂　東京都　大武美和子

平らかに霞ヶ浦にしぐれけり　土浦市　今泉　準一

西暦で刻まれし墓碑クリスマス　熊谷市　田島　良生

高野ムツオ 選

顎ひけば空は見えずよ北風を行く　西宮市　平田　あい

【評】そうそう、北風に向かって歩くには背を丸め顎を引き、一歩一歩踏ん張りながら足を進めることが大切。空は見えずとも雲上の太陽は前へ進む作者を応援している。

義肢の馴れ不具合の馴れ冬麗ら　鎌倉市　中江　優子

【評】義肢を付けざるを得なくなった。馴れるまで大変な苦労があった。しかし、「冬麗ら」が前向きの逞しい人であることを伝える。

顔ぢゆうの筋肉動く牡丹鍋　北本市　萩原　行博

【評】猪の肉を口に詰めるだけ詰め込んで、懸命にもぐもぐ噛んでいる。確かに顔の筋肉は皆動く。若者だろう。野趣に溢れる。

ちりちりにもみじの散れば蟹の如　秩父市　石橋その子

年の湯や働きづめの招き猫　志木市　谷村　康志

屈まりて侏儒となり見る霜柱　横浜市　我妻　幸男

野も山もみな黙らせて霜光る　佐野市　桑原　博

石蕗咲くや一人暮しの家増えし　龍ヶ崎市　小宮　光司

木の葉降るふりふりふりてふり止まず　前橋市　内藤　光

ピラカンサ息詰まるほど実りけり　川口市　清正　風葉

正木ゆう子 選

寒空や夫と「せーの」で切る電話　東京都　松永　京子

【評】どちらかが先に切って、相手が寂しい思いをしないよう、同時に切る。遠距離恋愛のような二人。入院などで離れていても、携帯電話で話すことのできる時代である。

小規模のデイサービスやかぶらプリン　東京都　伊東　茂樹

【評】なんとお洒落なデザート。他の料理もきっと工夫されているのだろう。上五中七の事務的な言葉が、蕪のプリンで一転して、素敵な句に。

ケアマネが泣いて師走の会議果つ　静岡市　山本　正幸

【評】前句と並べると、老人施設の表と裏が見えるようで、せつない。こちらも「泣いて」以外は事務的な言葉のみ。しかし深く現状を伝える。

平和なら無き平和賞冬の空　南房総市　山根　徳一

手話教へサンタクロース送り出す　大阪府　池田　寿夫

落葉踏むここなら転んでもいいか　神奈川県　中島やさか

四ツ割にして白菜のこの値段　川崎市　堀尾　笑王

せいこ蟹祖母の昔はお八つとや　神戸市　増田　嗣夫

口笛を風に預けし冬野かな　東京都　本多　明子

「寒いね」の一言しこり解しけり　埼玉県　矢内とき子

小澤　實 選

傾きて急反転し独楽止まる　国分寺市　野々村澄夫

【評】独楽の止まるまでの動きを丁寧に描いている。まず、傾いて、最後は急反転までして、というところに現実感がある。人の姿もまた重なってくる感じもあるか。

除雪車は夜明けの合図友の通夜　さいたま市　山もと　明

【評】葬儀の前日、死んだ友の遺骸を守って終夜過ごした。除雪車が来たことで、夜が明けたことをさとっているのだ。忘れられない夜明け。

ふつふつの泡のつぶやき寒造　岸和田市　宇野　京子

【評】寒造は寒中酒をかもすこと。ふつふつと泡が生まれ、発酵が進んでいることがわかる。「つぶやき」という表現にも酒への愛を感じる。

米空母イマヨコスカニアリ開戦日　高槻市　村松　譲

数へ日の無蓋貨車ゆく線路かな　相模原市　はやし　央

牡蠣小屋の旗パタパタと千切れさう　福山市　松崎　映子

我が足を舐める猫舌掘炬燵　藤井寺市　糀谷　終一

かじけ猫屋外給湯器の上に　横須賀市　浅井　耕作

炬燵とはいはば人間捕獲器か　甲府市　村田　一広

橋梁の打検の音や冬の川　倉敷市　中路　修平

くださいの会釈覚えし小鹿かな　木津川市　島野　秀子

【評】「空の闇星にかへして花火果つ」（布野寿）、「来る雁に空の扉を開け放つ」（加治美智子）も大きく、面白く読んだが、この句が印象に残った。奈良公園の小鹿たちの煎餅をねだる姿が優しく描写されている。ノーベル賞を受賞した団体を詠った「うつくしい花の名のやうひだんきやう」（古屋冴子）も時局詠として巧み。（矢島渚男）

年間賞　俳句①

木の芽きら櫟の金に楢の銀　埼玉県　竹本　遊児

【評】俳句はリズムの詩。木の芽の「こ」から始まってカ行の韻が一句全体に心の弾みそのものとなって響き渡っている。宮沢賢治の理想郷イーハトーブは、はるか彼方ではなく、私たちが生きるその場、その環境、そして、その心の中にこそ存在していると気づかせてくれる。雑木山とは、無尽蔵の命きらめく世界なのだ。（高野ムツオ）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭